

読書の効能

手塚広一郎 教授

(産業組織論)

「大学生活で何をすればいいかわからない」という学生に対して、私は読書を推しています。読者には優れた効能があるためです。その1つは、ありがちな言い方ですが、想像力を高めることがあげられます。最近の VR (バーチャル・リアリティ) やメタバースなどのデジタルで生みだされた仮想空間は、“視覚”や“聴覚”だけでなく、場合によっては“触覚”などにまで訴えます。それに対して、読書は、アナログな仮想空間を生みだします。

漫画やイラスト本などのような視覚に訴えるものを除いて、一般的な本は、あくまで文字だけで世界が表現されます。そのために読解力や想像力が求められ、自分の頭の中でそれを楽しむための世界や空間を設ける必要があるのです。VR やメタバースのような作られた仮想空間を受け入れるのではなく、自分の頭の中でいろいろなシーンを思い浮かべながら、能動的に世界を構築するという意味で、読書は想像力を高めるためのとても優れた手段であると言えます。

さて、本を読むことのもう1つの効能として、ボキャブラリー (語彙力) が増える、ということがあります。英語を学ぶ時には、英単語を覚える必要があります。実際、海外で自分の伝えたいことを適切な単語が思いつかないために、もどかしい思いをした人もいるかもしれません。実は、日本語でも同じことが言えます。しばしば、タレントさんがいわゆる「食レポ」をする場面がありますが、その味を伝えるときに、どれだけボキャブラリーがあるか、言い換えれば、どれだけ「使える言葉」をもっているかが表現力の差として大きく表れます。

こうした表現力を高めるためには、読書はかなり有効です。小説やノンフィクションなど様々な分野の本をたくさん読み、それによって「使える言葉」の引き出しを増やすことは、文章を書くのに役立つだけでなく、日常会話でも会話の中でのコミュニケーションを深め、共感力を高めることになるでしょう。

ボキャブラリーなら、SNS でたくさんの文章を読んだり書いたりすることで蓄積している、と考える人もいるでしょう。もちろん SNS もコミュニケーションを深め、語彙力を高めるためのとても重要なツールです。スマホ等で得られる情報は、相対的に短い文章量で新しい情報を効果的に手にすることができます。それに対して、読書は時間をかけて長い

文章を読むものです。時間や手間がかかる分、得るものも多いといえます。

それでは、いったいどのような本を読めばいいのでしょうか。私個人としては様々な分野の本を読むのが肝要と考えています。普段あまり読書をしていないという人は、取り掛かりとして、何かキーワードを決めた上で、新書や文庫本などから読み始めても良いでしょう。例えば、上記の「メタバース」という言葉が気になったのであれば、岡嶋裕史著『メタバースとは何か：ネット上の「もう一つの世界」』（光文社新書）という本があります。様々な本を読む中で、自分に合うものもあれば、そうでないものもあります。いちど、自分にあった本を見つけたら、それを何度も読み返してみるのもよいでしょう。数多くの出版されている本のなかから自分にあった本に出会うのは、とても価値があることです。

本を探すということ言えば、最近では、電子書籍のサイトで自分の注文履歴に応じておすすめの本が出るようになりました。これは、これまでの自分の好みの傾向にあった本を見つけるには有用です。その一方で、私は図書館で本を探すことを強くお勧めします。オンラインではなく、図書館に直接出向いて、自分にあった本を直接探すこと、これは一見すると時間の浪費と思うかもしれませんが、とても重要な意味をもっているのです。本は図書館にいます。本が私たちに会いに来てくれることはありません。是非、この大学生活の間に、図書館に足を運び、良い本に出会ってください。

筆者自己紹介

手塚 広一郎（てづか こういちろう）

1971年名古屋市生まれ。1995年一橋大学商学部卒、1999年一橋大学大学院商学研究科単位取得の後、2005年一橋大学にて博士（商学）を取得。2002年から2012年まで福井大学教育地域科学部・准教授（助教授）、2012年4月より現職。